

第二十四回 新城薪能

とき 平成二十五年八月十七日(土)
 午後四時三十分始
 ところ 新城文化会館大ホール

能組

仕舞

草紙洗小町
 湯谷 栖

杉野 莉子
 川村 美幸
 村田 昂平

午後4時30分

連調通

小町
 木の实段

佐藤 陽
 栗谷 明生

中西 深雪
 小林 寿枝
 伊藤 秀子
 永田 聡子
 星野 弘子
 今岡 アイ子

小舞

鶺鴒飼

大原 正巳

仕舞

老松 衣松
 羽衣 松
 半部 衣
 天鼓

恩田 衣恋
 榎本 奈月
 本田 洋子
 岩崎 葉子

狂言 蟹山伏

山伏 山本 勝

強力 酒井 淑規
 清川 松佐

後見 加藤 久和

午後5時頃

仕舞

飛鳥 川
 当麻 川
 桜川 風
 松城 城
 葛城

太田 温子
 伊藤 秀子
 中西 深雪
 小林 寿枝
 竹下 京子

午後6時頃

あいさつ

新城市長

穂積亮次

火入式

新城市議会議長
新城市教育委員長

夏目勝吾
瀧川紀幸

舞囃子

鞍馬天狗

長田悠那
長田共永

大鼓 清水利高
小鼓 伊藤秀子
太鼓 鈴木崇史
笛 今泉英三

狂言

花折

新発意 佐野泰三
住持 加藤久和

立衆 加藤賢一
立衆 水谷至男
立衆 山口俊一
立衆 天野雅夫
立衆 大原正巳

後見 酒井淑規

午後7時頃

能 猩々

シテ 杉浦史佳
ワキ 櫻本泰朗

後見 粟谷明生

大鼓 清水利高
小鼓 森田收
太鼓 中嶋康夫
笛 今泉英三

地謡
太田研司 佐藤陽
鈴木崇史 中村邦生
長田共永 粟谷能夫
竹内省吾 粟谷浩之

(終了予定 午後七時三十分頃)

主催 新城市

主管 新城市教育委員会

新城市文化事業運営委員会

新城薪能実行委員会

後援 新城市文化協会

新城市観光協会

あらすじ

狂言 蟹山伏

大峰・葛城で修業を終えた山伏が、供の強力を連れ、故郷の出羽・羽黒山に帰る途中のこと、大きな沢までやって来たところで、突然空模様が変わりました。不安になって先を急ごうとする二人の前に現れた異様な風体の者、どうやら蟹の精のようです。蟹の精は、山伏達の慢心を「二眼天にあり、一甲地につかず・・」と懲らしめようと現れたのだと言います。甲羅を打ち砕いて晩の汁にしてしまおうと杖を振り回す強力ですが、素早い蟹の精に耳を掴まれて、身動きが取れません。慌てた山伏は祈り伏せようと懸命に数珠を揉み始めます・・・

狂言 花折

連日の日和に恵まれた春の一日、下京辺の若者が花見に西山の寺を訪ねたところ住持が不在で、その上花見禁制になったと云って留守を預かる新発意に断られます。やむなく外から花を眺め酒宴となりましたが、酒好きの新発意は、外から聞こえる謡の聲に誘われて、ついつい中に入れてしまいます・・・

※新発意・・・(しんぼち) 出家して間のない者

能 猩々

中国の金山の麓、揚子江のほとりに高風という大そう親孝行で評判の高い男がいました。ある晩のこと、高風は揚子の市でお酒を売れば、富み栄えることができるという夢を見ます。夢のお告げに従うと高風は次第に金持ちになりました。高風が出す市では、不思議なことがあります。いつも高風から酒を買って求めて飲む者がいたので、いくら酒を飲んでも顔色が変わることがありません。高風が不思議に思い、名を尋ねると海中に住む猩々だと名乗って帰っていききました。その日、高風は、酒を持って潯陽の江のほとりへ行き、猩々が現れるのを待っていました。そこへ赤い顔の猩々が現れます。

猩々は友の高風に会えた喜びを語り、酒を飲み舞を舞います。そして心の素直な高風を称え、今までのお酒のお礼として、酌めどもつきない酒壺を贈り酔いのままに伏します。それは、高風の夢の中での出来事でしたが、酒壺はそのまま残り、高風の家は長く栄えました。

この能は、酌めどもつきぬ、飲めども変わらぬ秋の夜の杯と舞う猩々の能舞は、人間のあらゆる憂悶を排除するものとして、秋の夜静かに見る能の一つです。

新城と能

新城の能は新城の歴史とともに始まりました。長篠・設楽原の戦いの後、長篠城の城主であった奥平信昌は、新しいお城を郷ヶ原（現新城小学校）に築きます。これが新城という地名の始まりです。そして、天正四年（一五七六）、その落成祝いに観世与三郎を招き、城中二の丸で祝い能を催したのがこの始まりです。

その後、元文元年（一七三六）、領主管沼定用の家督相続を祝い、富永神社で能を奉納しました。これが例となり、祭礼のときに地区の氏子が社前で能を奉納するようになりました。

以後、この富永神社の能舞台（市指定有形文化財）で町衆によって二七〇年余り祭礼能（市指定無形文化財）として綿々と継承され、今に続けられています。

新城薪能

たきぎのう

新城市においては新城文化会館が完成したことを契機に、平成二年第一回「新城薪能」が催され、市民の間で大好評を博しました。今回で二十四回目を迎え、新城の夏の風物詩として市民の皆様親しんでいただいております。

今後とも新城薪能は、富永神社で行われる祭礼能とは別に、流派を問わず誰でも参加できる、まさに「能どころ新城」を目指しております。現在、日本全国で二〇〇ヶ所ほど薪能が催されていますが、新城薪能のように、シテ方、ワキ方、囃子方、狂言方のすべてが素人というのはほとんど例を見ないといわれております。

この新城の能を、永い伝統を持つ富永神社祭礼能とともに、より市民の皆様可愛さるるよう発展させていく事が私たちの願いです。